

本年度の 重点目標	分 掌	本年度の重点目標を 達成するための各課 ごとの重点目標(め ざす具体的な姿)	本年度の重点目標を 達成するための各課 ごとの具体的方策 (教育活動)	評価基準	中間期の達成状況・課題 (結果と成果)	総合 評価 (中間 評価)	年度末の達成状況 (結果と成果)	評価基準に 対する評価	総合評価 (最終評価)	本年度の課題と次年度の方策
1 可能性 を引き出 す個別最 適な学び の促進	教 務 課	「千鳥型学習指導の スタンダード」に基づ く授業の実践、およ び継続的な指導の改 善を推進する。	校内互見授業と公開 授業において、授業 実践の成果と課題を 教員間で共有できる よう、授業改善につ ながる枠組みを整え る。	学校自己評価アンケート(生徒)で評価。 「笠岡高校で行われている授業は、魅力的で、意 欲的に取り組みたいとなる授業ですか。」 ①はい・そう思う ②だいたいそう思う ③あまりそう思わない ④いいえ・そう思わない ①+②の割合(昨年度78%) 4:80%以上、3:75%以上、 2:70%以上、1:70%未満	・6月～7月に校内互見授業を実施した。教科 を超えたグループを作り、互いに1つ以上の 他教科の授業を見学した。実施後は「授業見 学メモ」を用い授業者と見学者で意見交換を した。 ・授業力向上のための教員研修を行い互見 授業全体の振り返りを行った。 ・11月に第2回公開授業および互見授業を実 施した。 ・11月に生徒による授業評価アンケートを効 果的な方法で実施した。	B	・6月21日～7月2日、11月8日～19日に校 内互見授業を実施した。積極的な意見交 換の結果、教科指導について教科の枠 を超えた知見の共有が図れた。 ・学校自己評価アンケート(生徒)の該当 項目の肯定的回答(①+②)の割合は 72%であった。 ・生徒による授業評価アンケートの結果 を教科内で分析し、成果と課題を教員全 体で共有した。 ・新教育課程のもとでの学習評価につい て、各教科でシミュレーションを行い、来 年度の実施に向けて指導と評価方法に ついて共通理解を深めた。	2	B	・来年度入学生から新しい学習指導 要領での学習となる。主体的・対話的 で深い学びを実現するよう、教科内 及び教科を超えた研究と実践が必要 となる。 ・来年度は学習機器としてiPadを使う 生徒が全体の3分の2を占める。効 果的な活用方法についての研修、活 用事例の蓄積、共有を進める。
		少人数、習熟度別授 業の効果を高める工 夫を実践し、成果を 共有する。	学力向上委員会と協 働し、少人数、習熟度 別授業の効果を高め る工夫の実践を各教 科に促し、その成果 を共有できる枠組み を整える。	学校自己評価アンケート(生徒)で評価。 「選択授業や進路志望、習熟度等で講座を分けた 授業は、あなたの学力の向上につながっている と思いますか。」 ①はい・そう思う ②だいたいそう思う ③あまりそう思わない ④いいえ・そう思わない ①+②の割合(昨年度91%) 4:95%以上、3:90%以上、 2:85%以上、1:85%未満	・少人数、習熟度別授業について教科会議 等で定期的に情報交換を行っている。 ・各教科で設定した研究テーマに基づいて校 内公開授業を実施し、教科内および他教科と の意見交換を通して学力向上につながる効 果的な授業展開等の改善を図っている。	B	・学校自己評価アンケート(生徒)の該当 項目の肯定的回答(①+②)の割合は 90%であった。 ・教科会議等で定期的に情報交換を行っ た。	3	B	・新教育課程のもとでの新しい科目に ついて、少人数、習熟度別授業のあ り方を引き続き検討する必要がある。
	図 書 情 報 課	生徒が図書を活用 し、自らの興味関心 や学習内容を深めたり 広げたりできるよう 支援する。	教科等と連携して書 籍を選定・購入・配置 し、生徒が図書館内 外で日常的に活字に 親しむ環境を整え る。	一人あたりの貸出冊数で評価。 (コロナ禍以前の平均値:4.2冊/1人、昨年度3.1 冊/1人) 4:4.5冊以上、3:4.0冊以上、 2:3.5冊以上、1:3.5冊未満	・書籍の充実を図るため、4～9月に新たに 282冊を購入した(寄贈68冊含む、昨年度は 年間583冊購入)。 ・書架を更新し、レイアウトを変更するなど、 図書室を利用しやすいよう整えた。 ・読書を促すイベントとして、読書LHRを図書 委員会が企画している。 ・貸出数の昨年同時期(9月30日現在)からの 変化は、総数(815→645冊)、1年(544→294 冊)、2年(98→249)、3年(173→102)であった。	B	・書籍の充実を図るため、4～1月に新た に413冊を購入した。 ・図書館生徒用PCをWindows4台から iPad5台に変更した。 ・館内サインを変更し、資料を探しやすい ように環境を整備した。 ・図書委員会が読書を促すイベントとし て、読書週間、スタンプラリー等を企画・ 実行した。また、読み聞かせDVDを作成 し、こども園と交流した。 ・貸出数の昨年同時期(1月31日現在)か らの変化は、総数(1444→1054冊)、1年 (883→493冊)、2年(264→394)、3年(296 →167)であり、一人あたりの貸出冊数は 2.2冊/1人であった。	1	B	・根本的な課題として、来館者数が少 ないため、来館を促すような仕組み 作りが必要である。 例えば、今後の新しい授業づくりの 中で、学習効果を高めるために、図 書館や併設のマルチメディアルーム を活用する場面を増やすことを、学力 向上委員会やICT委員会と協力して 検討していきたい。 ・次年度のiPadの活用方法として、電 子書籍を読めるようにしたり、館内 でのイベント(上映会やビブリオバトル 等)を考えている。
		生徒が情報機器を活 用し、自らの興味関 心や学習内容を深め たり広げたりできる よう支援する。	教科等と連携して ICTを利活用できる 環境を整え、個別最 適な学びを支援す る。	学校自己評価アンケート(生徒)で評価。 「笠岡高校のICTを利活用した学習は、あなたの 興味関心を深める、または、学習内容の理解を助 けるものとなっていると思いますか。」(新規項目) ①はい・そう思う ②だいたいそう思う ③あまりそう思わない ④いいえ・そう思わない ①+②の割合(新規のため昨年度なし) 4:90%以上 3:80%以上 2:70%以上 1:70%未満	・年度初めに校内のWi-Fi環境を再整備し生 徒端末の利用可能教室を拡充した。 ・各教室にAppleTVおよびスピーカーを設置 し、教員用iPadを利活用しやすくした。 ・1年生の生徒端末は、様々な授業で活用で きている。	A	・学校自己評価アンケート(生徒)の該当 項目の肯定的回答(①+②)の割合は 80%であった。 ・2～3年生向けに貸出用iPadを15台整備 した。 ・各教室にWebカメラを常備し、講演会等 の配信に必要なICT環境を整備した。 ・1年生にはMicrosoft365アカウントを用 意し、iPadでExcelやWordが利用できる環 境を整備し、授業等で活用している。 ・端末やGoogle等の故障や不具合などの トラブルに、早急に対応できた。	3	A	・本校ではGoogle、Apple、Microsoft 等、多くのサービスを利用している が、今年度、それらの運用面の利便 性の違いや、いくつかの機能は一本 化が可能であることなどが分かってき た。次年度は、サービスの整理や選 択が必要である。 ・iPad等の利用に対して、事例の収集 と活用についての検討、情報の共有 が必要である。ICT委員会を中心に 積極的に検討していきたい。

本年度の重点目標	分掌	本年度の重点目標を達成するための各課ごとの重点目標(めざす具体的な姿)	本年度の重点目標を達成するための各課ごとの具体的方策(教育活動)	評価基準	中間期の達成状況・課題(結果と成果)	総合評価(中間評価)	年度末の達成状況(結果と成果)	評価基準に対する評価	総合評価(最終評価)	本年度の課題と次年度の方策
2 夢と志を育むキャリア教育の深化	進路課	「総合的な探究の時間(ACT)」を中心としたカリキュラムマネジメントを推進し、生徒の主体性と挑戦する力を育てる。	ACTプログラムでの学びと教科や特別活動での学びとの往還を意識した教育活動が展開できるよう、校内外での生徒の学びの機会の充実と探究活動に関する教員研修の充実を図る。	学校自己評価アンケート(教員)で評価。 「笠岡高校は『総合的な探究の時間(ACT)』などを利用して、将来の進路や生き方について、考えを深めさせるように、計画的に指導していますか」 ①はい・そう思う ②だいたいそう思う ③あまりそう思わない ④いいえ・そう思わない ①+②の割合(昨年度92%) 4:94%以上、3:92%以上、2:90%以上、1:90%未満	・年次団をサポートし、1年「地域学」、2年「テーマ探究」について、フィールドワークやアンケート等の校外調査を充実させた。12月24日のACTデーでの生徒発表の充実に向けてさらに支援する。 ・各教科等と連携して、教育用クラウドサービスの積極活用を進め、生徒の活動の振り返り等が効率的にできるよう支援した。 ・ベネッセ社マナビジョンの活用やfromページ社夢ナビライブWeb参加等に取り組み、キャリア支援の個別最適化を図った。 ・探究活動の指導のための外部講師招聘によるRESAS(リーサス)に関する教員研修は中止したが、iPad活用研修会を適宜実施している。	B	・学校自己評価アンケート(教員)の該当項目の肯定的回答(①+②)の割合は82%であった。 ・校内外での学びの機会については、カブトガニ博物館の企画や理数系のコンテスト等への参加など、年間を通じて積極的に提供できた。 ・探究活動の成果を校外で発表する外部コンテストなどの機会にも積極的に参加し、参加生徒は良い刺激を受けることができた。 ・ACTの指導担当教員向けのiPadに関する複数回のミニ研修によって、情報整理の指導や提出物の点検を、クラウド等を活用して効率的に行うスキル習得を図り、指導面での負担軽減を進めた。 ・キャリア教育優良学校として文部科学大臣表彰を受けた。	1	B	・校外における学びの機会は、今後も充実させていく。コロナ禍においてもリモート説明会などの機会を充実させていきたい。 ・ACTについては、総探検討委員会を中心に、教員間で趣旨の共有を図り、内容や配当時間等を検討して、より良いものにしていきたい。
		キャリアカウンセリングを充実させ、個性と可能性を伸ばす進路指導を推進する。	生徒一人一人に応じた教科カウンセリングや個人面談、進路志望別のガイダンスや体験機会の充実を推進する。	学校自己評価アンケート(生徒)で評価。 「笠岡高校は『総合的な探究の時間(ACT)』などを利用して、将来の進路や生き方について、考えを深めさせるように、計画的に指導ができていますか」 ①はい・そう思う ②だいたいそう思う ③あまりそう思わない ④いいえ・そう思わない ①+②の割合(昨年度83%) 4:85%以上、3:83%以上、2:80%以上、1:80%未満	・新規事業として、「放課後進路相談室」を開設した。キャリア支援担当教員による相談に加え、大学生によるzoom相談会を実施した。生徒が利用しやすいようさらに環境整備に努める。 ・キャリア講座として、小論文対策講座(5月)、志望理由書作成講座(8月)、大学説明会(3大学5学科)、現役看護師による医療系ガイダンス(8月)を実施した。	A	・学校自己評価アンケート(生徒)の該当項目の肯定的回答(①+②)の割合は79%であった。 ・生徒一人一人に応じた教科カウンセリングは、定期考査やテスト・模試等の前後などに継続的に行う事ができた。 ・1年生では、生徒自身がiPadを活用することにより、自己の振り返りやACTの活動を効率的に行なうことができた。 ・国公立大学の推薦・総合型入試の定員割合が増加していることを踏まえ、生徒一人一人の個性を生かせる進路実現につながるよう、担任会や全体会で情報交換や指導方法の検討を進め、担任面談や個別指導等のカウンセリング体制を充実させた。	1	B	・本校のキャリア教育の流れを生徒が十分理解できず、各プログラムの教育効果が上がっていないことが課題である。ACTの趣旨をキャリア形成と関連づけながら説明することを丁寧に行っていききたい。また、このための教員間の目線合わせも十分行っていきたい。 ・進路志望別ガイダンスやキャリア講座などのキャリア形成プログラムの種類と深まりを充実させることで、幅広い選択肢の中から生徒に自分の可能性を考える機会を与え、希望する進路の実現に向けた学力向上のニーズにしっかり応えられる体制を整えていきたい。
3 主体性と豊かな	総務課	生徒が主体的に広報活動に参画できる機会を設けるとともに、生徒目線の広報活動を推進する。	オープンスクールや千鳥ゼミ、中学校母校訪問、学校説明会等に使用する動画作成や当日のプレゼンテーションなど生徒が主体的に活動する場を設ける。	広報活動において生徒が参画した事業数で評価。(昨年度:3件) 4:4件以上 3:3件 2:2件 1:1件以下	・第1回オープンスクールと千鳥ゼミでは生徒主体の準備や運営ができた。 ・生徒が制作した部活動紹介動画を動画配信サイトに投稿した。 ・コロナ禍のため中止した中学校母校訪問の代替として、生徒が作成したスライド資料を各中学校に送付した。	A	・広報活動において生徒が参画した事業数は、第1回オープンスクール、千鳥ゼミ、部活動紹介動画作成、笠岡放送「そこが聞きたい」収録、学校説明会の5件で、多くの生徒が主体的に活動した。 ・11月の学校説明会で実施した在校生による座談会では、参加した各生徒が説明内容を主体的に準備・構成し、説明を受けた中学生・保護者から高評価を得た。	4	A	・本年度はコロナ禍のため、予定していた地区別学校説明会や中学校母校訪問、部活動体験・見学が中止となった。 ・次年度も生徒が主体的に広報活動に参画できるよう活躍の場を確保し、生き生きとした生徒の姿をさまざまな形で発信したい。

本年度の重点目標	分掌	本年度の重点目標を達成するための各課ごとの重点目標(めざす具体的な姿)	本年度の重点目標を達成するための各課ごとの具体的方策(教育活動)	評価基準	中間期の達成状況・課題(結果と成果)	総合評価(中間評価)	年度末の達成状況(結果と成果)	評価基準に対する評価	総合評価(最終評価)	本年度の課題と次年度の方策
つながりを生み出す活動の充実	生徒課	ホームルーム活動や生徒会活動(各種委員会や学校行事等)への生徒の主体的な参加を促す。	・生徒会総務部を主体とした各行事の実行委員の組織化、及び、各実行委員会における事前打ち合わせや役割分担が効果的に行われるよう支援する。 ・できるだけ多くの委員会で、生徒が主体的な活動に取り組めるよう支援する。	学校自己評価アンケート(生徒)で評価。 「ホームルーム活動や生徒会活動(各種委員会や学校行事等)に、生徒が主体的に参加していると思いますか。」 ①はい・そう思う ②だいたいそう思う ③あまりそう思わない ④いいえ・そう思わない ①＋②の割合(昨年度:生徒89%、一昨年度:89%) 4:95%以上、3:90%以上、 2:85%以上、1:85%未満	・行事ごとの実行委員には、希望生徒が多く集まった。役割分担等をスムーズに行うことで主体的かつ組織的に活動することができた。 ・行事でのスマホカメラ使用の許可に向けて、生徒会3役や評議員を中心に、全校での話し合いやルール作り、行事実施後の振り返りを主体的に行うことができた。	A	・学校自己評価アンケート(生徒)の該当項目の肯定的回答(①＋②)の割合は昨年度と同じ、89%であった。 ・行事でのスマホカメラの使用許可に向けて、生徒会や評議員を中心にルール作りや人権意識の喚起に関わる活動をさらに進めることができた。 ・今年度初めて「3年生を送る会」を企画し、ビデオメッセージを制作した。 ・各行事での実行委員一人一人の活躍や、新企画の立案・実施、スマホカメラ関連の活動等、「学校生活に主体的に参画する生徒」の増加がめざましい。	2	A	・アンケート結果の数値は3年間同じであるが、生徒の主体的な活動が増えてきているので、引きつづき支援していきたい。 ・今年度はスマホカメラの件に生徒会3役がかかりきりとなってしまった。次年度は、行事の運営とリーダー育成に向けて、総務部と実行委員会の関連や組織体系を見直して機動性を高めていきたい。

本年度の重点目標	分掌	本年度の重点目標を達成するための各課ごとの重点目標(めざす具体的な姿)	本年度の重点目標を達成するための各課ごとの具体的方策(教育活動)	評価基準	中間期の達成状況・課題(結果と成果)	総合評価(中間評価)	年度末の達成状況(結果と成果)	評価基準に対する評価	総合評価(最終評価)	本年度の課題と次年度の方策
3 主体性と豊かなつながりを生み出す活動の充実	生徒課	挨拶をはじめとしたコミュニケーションスキルを高め、好ましい人間関係を形成する能力の向上を図る。	・生徒主体のあいさつ運動の実現に向けて、生活委員会や生徒会総務部を支援する。 ・挨拶を日々励行するとともに、社会で必要な基本的なコミュニケーションスキルの向上を図る。	学校自己評価アンケート(生徒)で評価。 「笠岡高校の生徒は、学校内や地域で、積極的に挨拶ができていますか。」 ①はい・そう思う ②だいたいそう思う ③あまりそう思わない ④いいえ・そう思わない ①＋②の割合 (昨年度:68%、一昨年度:55%) 4:80%以上、3:70%以上、2:60%以上、1:60%未満	・あいさつ運動は生活委員会による立案と実施ができています。 ・日常的に挨拶のできる生徒が徐々に増加している。 ・後期は生徒会役員を中心にあいさつ運動の輪を広げ、活気ある学校にしていけるよう支援する。	B	・学校自己評価アンケート(生徒)の該当項目の肯定的回答①＋②の割合は昨年度から微減し、64%であった。 ・生徒によるあいさつ運動や教員の日々の声かけにより、挨拶ができる生徒は徐々に増加している。	2	B	・生活委員会による生徒中心のあいさつ運動は定着しつつある。今後も継続していきたい。 ・挨拶については日常生活の中で浸透しつつあるものの。積極性にやや欠ける。日常における指導が効果的であるので、生徒のさまざまな活動の場面は確保し、支援を継続していきたい。 ・他者の気分、体調を思いやる声掛けや元気づける関わり方、または、自分の状態をうまく相手に伝える方法など、挨拶からさらに進んだコミュニケーションスキルの向上を促せるように支援したい。
	健康環境課	教育相談にかかる校内体制を整備し、教育相談的関わり方についての意識やスキルの向上を図る。	生徒支援に関する教員研修を充実させる。	生徒支援に関する各研修後の教員アンケートで評価。 「生徒支援についてスキルアップできたと思いますか。」 ①はい・そう思う ②だいたいそう思う ③あまりそう思わない ④いいえ・そう思わない ①＋②の割合の平均 4:90%以上 3:80%以上 2:70%以上 1:70%未満	・hyper-QU実施後の研修会(1年団)で、学級集団や個々の生徒の心理状態について共通理解を図り、面談等で活用した。 ・多様な生徒に対して、教員が固定的、一面的な見方で接するのではなく、安心感のある関係性を築いた上で、「個に応じた指導・支援」という視点から共感的で未来志向な生徒支援が行えるようにするための教員研修を実施する。	B	・生徒支援に関する教員研修を、10月に「自分と相手を大切にするために」と「SOSの受け止め方」、12月に「特別支援教育に関する研修」と題し、外部講師を招いて実施した。研修は希望者研修という形式で行い、日頃課題としてとらえていることを質問したり、議論したりすることができた。研修後の教員アンケートの該当項目の肯定的回答①＋②はそれぞれ93%、92%、100%であった。 ・研修に参加できなかった教員へは、研修の資料や内容のまとめなどを、ICTを活用して共有することができた。	4	A	・他者とのコミュニケーションや学習面のつまずきから、自信を失う生徒が多い。ICT化が進み、より複雑化する世界で生きる生徒の環境を理解したうえで、自分で立ち上がる力を身に付けさせる指導支援が必要と考えられる。 ・従来の知見や教員個人の力量だけでは対応が難しいケースが増えているので、引き続き、生徒支援に関する研修を実施し、教員個人および全体としてのスキルアップを図りたい。
		防災・安全についての生徒の意識を高め、防災・安全に関する社会貢献活動に積極的に取り組もうとする態度を養う。	防災講演会を企画する、総合的な探究の時間に「防災」「安全」に関わるテーマを追加するなど、新たな企画に取り組む。	各企画の後に実施する生徒アンケートで評価。 「防災・安全意識が向上しましたか」「社会貢献活動(実践を含む)への意欲が高まりましたか」 ①はい・そう思う ②だいたいそう思う ③あまりそう思わない ④いいえ・そう思わない ①＋②の割合の平均 4:90%以上 3:80%以上 2:70%以上 1:70%未満	・1年「地域学」で防災分野を新設した。2年「テーマ探究」でも防災をテーマに探究するグループができた。 ・1年「社会と情報」で、岡山県GISを活用し、土砂災害などの危険地域を載せた登校ルートマップを作成した。 ・6月の防災訓練後の生徒アンケートでは、「避難場所と経路がよくわかりましたか」「防災クイズは防災意識を高めるのに役立ちましたか」という項目で、肯定的回答がそれぞれ98.7%、99.3%であった。 ・2年「現代社会」の夏季選択課題作文に防災小説を設定したところ、92名が選択した。事後アンケートでは「防災小説を書くことで災害を自分のこととして考えることができた」という項目で肯定的回答が95.5%であった。	A	・10月25日に全学年を対象に実施した防災教育講演会後の生徒アンケートでは、「防災・安全意識が向上した」「ボランティアなど社会貢献活動への意欲が高まった」という項目の肯定的回答①＋②はそれぞれ、99.6%と96.9%であった。 ・1年「地域学」で地域防災をテーマに探究した班の1つが、12月に開催された県教育委員会主催の「高校生探究フォーラム2021」でのポスターセッションに出場した。 ・今年度実施した新たな企画はどれも生徒の防災・安全意識の向上につながった。	4	A	・本年度は、学校安全総合支援事業の指定を受け、その予算を活用して、東北から東日本大震災で被災された方を防災教育講演会の講師として招くことができた。今後同様の講演会を実施する場合、費用が課題となる。リモートによる講演を含め、検討したい。 ・その他の企画は基本的に継続実施可能である。特に1年「地域学」の探究テーマの1つに「地域防災」を継続することは効果が高いので総探検討委員会と協議したい。